

○● 研修会特集 公開講座 ●○

私はライブラリアン！映画の中の図書館員

東 史

図書館映画とは何かご存知でしょうか。造語なのですが、図書館や図書館員の登場する映画のことを総称して図書館映画＝Library Cinema と呼び、それらについて情報交換しているリブシネマ (Libcinema) メーリングリストという ML があります。和光大学情報センターの市村省二氏が始められたもので、氏の HP から入る事が出来ます。私も参加メンバーの一員で、そこでの情報を元に「映画の図書館・図書館の映画」と題した図書館映画の記事を『図書館雑誌』に書いたりしてきました。

同じく ML 会員の飯島朋子氏(一橋大学図書館)は図書館映画のリスト作りにご熱心で、『映画のなかの図書館』(日本図書刊行会)を出版されつい先頃『図書館映画と映画文献』という改訂版も出されました。それに拠れば図書館映画に類する作品は現在 631 本ですが、書店や個人の書齋も若干対象となっているのでそれを引くと 550 本ほど。そのバラエティの豊かさについてまずお話しします。

様々な国の図書館が登場しますが、国別に見れば圧倒的に多いのは米国。これは米映画の公開数が断然多い事と、図書館が市民生活に深く根付いている事の証明でしょう。

中でもニューヨーク公共図書館は特に有名で多数の作品に出ています。オードリー・ヘプバーン主演の『ティファニーで朝食を』(1961 米)

には、彼女が知り合いの作家に連れられてここを訪れ、図書の請求の仕方などを説明される場面があります。また新進気鋭時代の Coppola 監督作品『大人になれば』(1967 米)では、入館、カード目録調べ、カウンターへの請求、請求票の書庫への缶送、本の取り出しなど一連の流れがまるごとオープニングになっています。オカルトコメディ『ゴーストバスターズ』(1984 米)では、幽霊の登場する場所として本やカードの浮遊などが描かれています。

古今東西の図書館の多様さもいくつか挙げてみましょう。中世北イタリアの僧院の書庫が出てくるのは、重厚なミステリー『薔薇の名前』(1986 仏・西独・伊)。『永遠の帝国』(1995 韓国)では奎章閣と呼ばれる王朝時代の王立図書館が見られます。江戸時代の金沢藩の文庫が出てくるのはオムニバス映画『冷飯とおさんとちゃん』の第一話。『惑星ソラリス』(1972 ソ連)には宇宙ステーションの図書室も登場します。

ベルリン国立図書館を堪能出来る『ベルリン・天使の詩』(1987 独)はその後リメイクされ、その『シティ・オブ・エンジェル』(1998 米)ではサンフランシスコ公共図書館が見られます。『太陽雨』(1987 中国)の舞台は中国の大都市の近代的図書館。『白い馬』(1995 日本)にはモンゴルの遊牧民の少年が、街の図書館に立ち寄る場面があります。インドの楽しいミュージカル映画『ラジュウ出世する』(1992 インド)には、ボンベイの図書館が登場します。

特殊な館種ですが、刑務所図書館は米映画に

HIGASHI Fumi

東京大学大学院数理科学研究科図書室

higashi@ms.u-tokyo.ac.jp

はよく出てきます。中でも『ショーシャンクの空に』(1994 米)は見応えのある秀作。翻って病院図書館を扱った語りに足る作品は見当たらないのです。ヒッチコック監督作品『白い恐怖』(1945 米)にちらりと見える病院のライブラリーは、司書もいない単なる書齋に過ぎません。ただ病院での図書サービスの描写は『月を追いかけて』(1984 米)に出てきます。第二次世界大戦中の傷病兵への巡回サービス場面です。

また医学と図書館の好例として挙げたいのが『ロレンツォのオイル』(1992 米)。息子が治療法のない難病だと宣告された夫婦が、図書館に通い詰めて研究を重ねます。その真摯さや司書とのやり取り、読み聞かせによる癒やしの力など、見るべきところの多い傑作です。

ところで映画での図書館の描かれ方にはいくつかのパターンが見られ、それぞれ場としての意味があるようです。疑問が生じると調べに行く調査の場、学生などの勉学の場、男女の出会いの場、心の安らぎを求める憩いの場などは、ごく普通の肯定的イメージと言えるでしょう。否定的イメージと思われるのは、特定人物の貸出記録等を調べるプライバシー侵害の描写、静かで整然とした場であることを揶揄してか大声を出したり、本やカードを乱したり、挑発的で際どいラブシーンを演じたりする事ですね。死角になっている書架の陰を迷路に見立てた殺人ミステリーなどは、図書館をあやしげな書物の森とイメージしているように思えます。

図書館司書の描かれ方も、肯定的なもの否定的なものに分かれています。前者は親切、知的、穏やかな人柄で誇りを持って仕事をしているイメージ。TV 局レファレンス部のベテラン司書が活躍する『Desk Set』(1957 米)、勉強家で感じのよい女性司書がヒロインの『太陽雨』、素晴らしい刑務所図書館を作り上げる『ショーシャンクの空に』が、私の好きな司書ベスト3の作品です。

後者は内向的、役人的、偏屈な本の番人としてのイメージが強調されています。利用者の言

葉をよく聞きませず冷たくあしらう『ソフィーの選択』(1982 米)の男性司書、エイズ患者である利用者のプライバシーを侵害する『フィラデルフィア』(1993 米)の嫌みな中年司書、規則を楯に少年の切実な利用希望をすげなく断る『ケス』(1969 英)の女性司書がワースト3というところでしょうか。

さらに誇張された姿でよく見受けられるのは女性の場合、地味服、ひつつめ髪、メガネの三点セット。可愛い気のないオールドミスという感じです。男性の場合、生気に乏しく鬱屈していて、社会的な落伍者のような描かれ方をされるようです。

しかしやはり図書館映画として面白いのは、誇りを持って生き活きと働く図書館司書が登場する作品でしょう。単なる書齋や本置き場と機能的な図書館の違いは、そこに有能な司書が居て本と人とを結んでいることにあるのだと思います。

最後に前向きで元気な図書館員が出てくる作品のご紹介を。『ハムナプトラ』(1999 米)のエヴリンはエジプトの古代博物館図書室勤め。いささかおっちょこちょいですが「私はライブラリアンなの！」と堂々と誇る画期的ヒロイン。『Desk Set』のミス・ワトソンはコンピュータ導入にもひるまない才気煥発のベテラン司書。『パーティーガール』(1995 米)は、ひょんなことから図書館に勤め、仕事の面白さに目覚める娘メリーの成長物語。いずれも見た後元気になる、気持ちのよい作品です。

映画は人の心に強い印象を残すものです。こういう魅力的な作品は図書館員にとって何よりのイメージアップになることでしょう。今後も素敵な図書館映画が出てくることを楽しみにしています。

関連サイト

<http://www.bekkoarne.ne.jp/~ichimura/>

<http://www.lib.hit-u.ac.jp/ijima/>

参 照

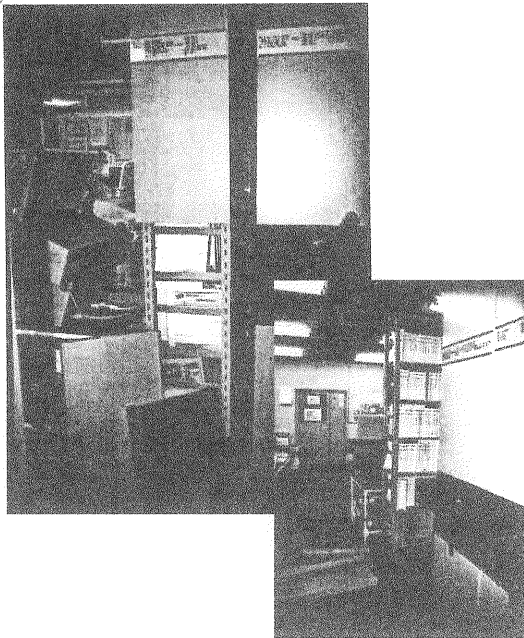
- 1) 東史：映画の図書館・図書館の映画. 図書館雑誌 1997;91(1):46-47.
- 2) 東史：アジア映画に見る図書館. 図書館雑誌 1998;92(2):100-101.
- 3) 東史：天使のいる図書館. 図書館雑誌 1999;93(4):274-275.
- 4) 東史：私はライブラリアン!. 図書館雑誌 2000;94(6):436-437.

の図書館 1987;124:34-39.

- 2) 滝沢正順：劇映画に現れた図書館と図書館員に関する一考察. 図書館界 1998;39(5):195-204.
- 3) 伊藤敏朗：映像表現における図書館と図書館員像に関する論考. 視聴覚資料研究 1991;2(3):120-123
- 4) 市村省二：図書館映画への招待. TRC ほんわかだより 1998;130:18-24.

参考文献

- 1) 本多信喜：映画に登場する図書館. みんな



会員だより

最近落ち着きましたが、今年は各地で地震に見舞われています。今春4月に静岡を襲った震度5の地震によって図書室も被害がでました。静岡県内は、地震対策がとられ、図書室内でも書架などがしっかり固定されている為、意外と被害は少なかったようです。当室では、最初の縦揺れの一撃で、固定されている移動ラックのフックがはずれてしまいました。この下にいたらと思うとぞっとします。固定されていないラックは、遊びがあるので大丈夫のようです。地震どころかビル全体が破壊されるこの頃です。対策といってもどうして良いか解りませんが、すぐに逃げ出せる準備をしておきましょう。

(静岡 天野)